

「住むこと」を多面的に捉え、「住まう」に多様性を持たせる

家とは何だろうか。家族とはどうあるべきなのだろうか。
これらの定義や価値というのは人それぞれであり、時代の流れや価値観によって変化し続けるものであると私は考える。
現在は個性やその人らしさを重視し、生活の中でも多く見受けられる。
今後さらに多様化する生活スタイル、価値観など“家”というあり方も共に多様化する必要があるのではないだろうか。
どこに、どうやっての「住むこと」。だと、どのようにの「住まうこと」。

今までの常識からの脱却。

1 『一住居＝一家族』から住まうを多様化

刻々と変化するライフスタイル、ニーズに対応できる柔軟な住宅。
標準的ではない家族に対応する新しい団地の提案。

- POINT 多様な平面プラン
- POINT つながりのある住空間
- POINT 外部との接点を生む増築

これからの集合住宅を想像する

2 『集まって住むこと』を再認識する

- 『集まって住む』ことは？
- = 第三者と共有する時間・空間・記憶を持つということ
 - = “家族”という垣根を越えたつながりや交流と共に住むということ
 - = 大きな家族のような集まり
 - POINT 住環境を変えるコンバージョン
 - POINT 緑の豊かさを残し、活かす仕組み

コンパクトプラン

■小さくコンパクトな暮らし

住居の面積は決して広いとは言えないが、1～2人暮らしの若者/中年世帯には生活するのに困ることはないだろう。
子ども部屋が必要になった際は、引っ越すのではなく、団地内にあるシェアハウスの部屋を一室借りるなどして対応していくことも可能である。

1～2人プラン

■土間で開く生活を

南側に玄関兼土間があることによって生活が外に広がっていく。
単身の学生や新社会人などはじめての一人暮らしにもピッタリ！
住む人によって土間の使い方は無限大。
その人らしさが外に広がっていく。

家族世帯向けプラン

■メゾネットで広く、

多様な生活スタイルを

家族がこれから増えていく可能性があったり、親世帯と暮らすことになった時も大丈夫！
二世帯住宅としても使えるメゾネットプランである。
今までの団地では想像もできなかったライフスタイルを送ることが出来る。

家族世帯向けプラン

■土間で広がる生活

玄関土間が生活の中心になるような住宅である。
土間での活動が、自然と外の共有デッキにも広がっていくことによって、閉鎖的で単一的な団地の姿を豊かにしていく。
部屋数や面積はそこまで広くないため、子どもが大きくなったら、団地内のシェアハウスの部屋を借りるなどすることもできる。

みんなの管理センター

■オープンな共有空間

現状の管理センターは狭く、とても閉鎖的な建物である。しかし、南側に大きなガラス窓を設け、ウッドデッキやコミュニケーションプレイスを設けることにより、住民以外の人との交流も自然と生まれるような空間である。
また、1Fには車寄せを設けたことで、週2回来る移動販売の待ち時間などには、縁側などに座って、住民同士の交流を促すような場も設けている。

単身高齢者向けプラン

■ひろく、つながる、楽しく

決して広いとは言えないが、体が不自由になっても利用しやすい水回りやスロープからの出入り可能な玄関などがあり高齢になっても優しい住居になっている。
億劫になりがちな外出や、人との交流なども、南側のデッキや縁側になどによって外に出るなどのきっかけを作っている。

シェアハウスプラン①

■新しい生活を試みる！

シェアハウスは賃貸のため、住人によって住む期間を自由に決められる。
単身の社会人や大学生、また団地内に家族が住んでいるが、一人部屋がほしくなったりした子供などが部屋を一時的に借りたりする。また、受験期の期間だけ一時的に部屋を利用したりすることもある。
自由で新しいカタチの団地へ。

みんなのダイニング

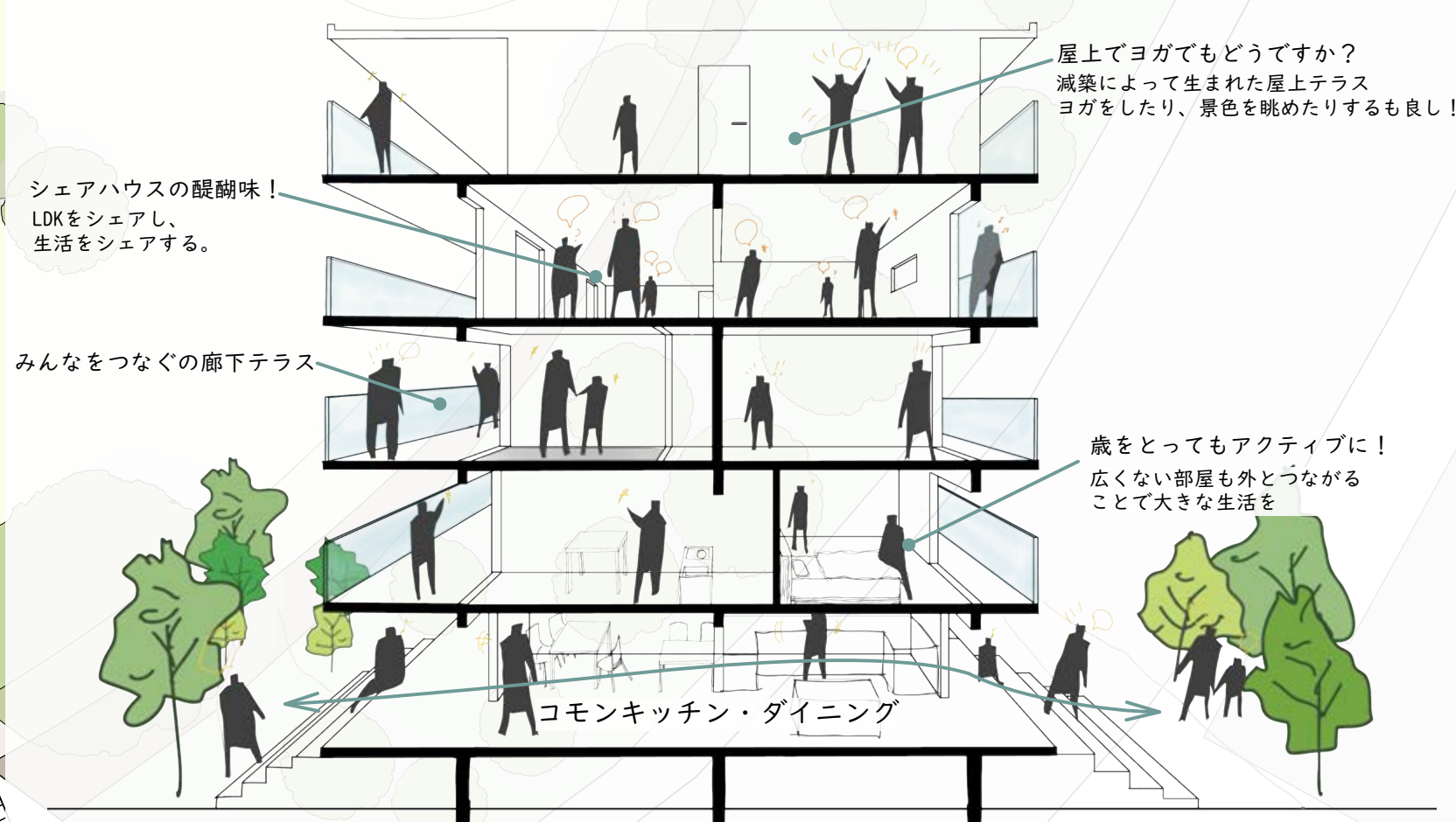
■みんなで食卓を囲う

団地に住む人なら誰でもいつでも使えるキッチン・ダイニング。
ダイニングテーブルに座って子供の宿題を見るお父さん。シェアハウスに住む人たちが集まって食事をする。和室で子供を休ませるお母さん。
使い方は人それぞれ。住民の憩いの場になる空間。

夫婦高齢者向けプラン

■団地でいつまでも末永く

単身高齢者向けのプランと比べると部屋が広く、2人で住むのに向いている。
水回りや室内建具などは体が不自由になったり車いすを使用することになっても十分余裕のある作りになっている。



5号棟断面イメージパース